

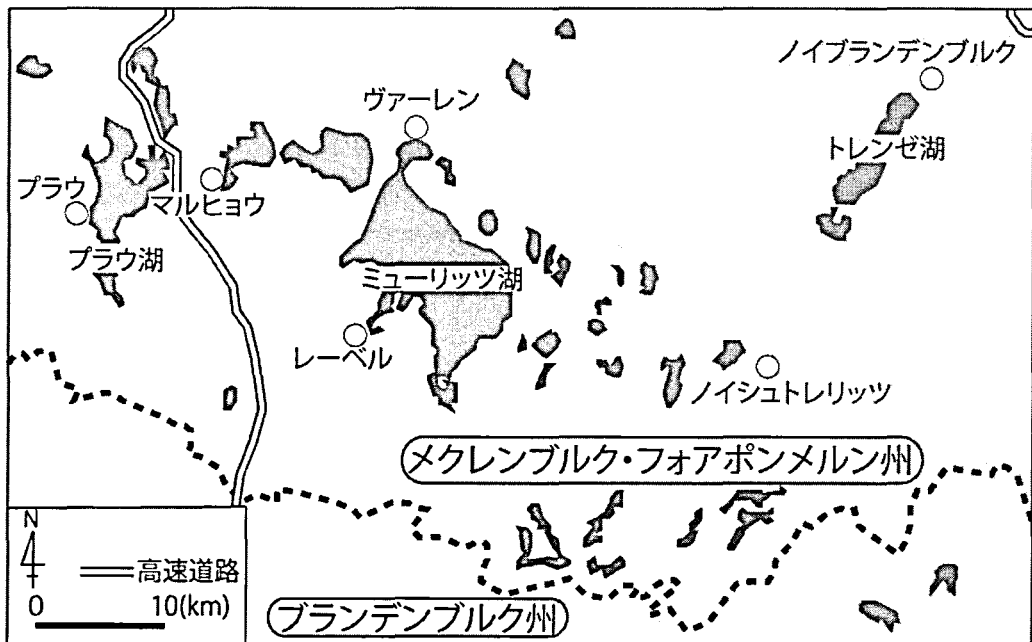
メクレンブルク湖水地方における観光の現状と今後の可能性

友原嘉彦

I 序論

1 研究目的

本論文の目的はドイツ新連邦州の1州であるメクレンブルク・フォアポンメルン州の南東部に位置するメクレンブルク湖水地方（第1図）を例に、中欧北部における観光地としての湖水地方¹⁾の現状と今後の可能性について検討することである。旧東ドイツにおいてメクレンブルク湖水地方はバルト海沿岸やハルツ山地と並ぶ国内3大観光地域（Kohl et al. 1986）であり、ドイツ再統一から20年が経過した現在、欧州有数の観光消費国である同国湖水地方の観光の現状と可能性を検討することは、同じく冷戦中に社会主義陣営に属した東欧西部におけるそのほかの湖水地方の観光傾向を考える上でも参考となるべき事例であると言える。



第1図 研究対象地域

(著者作成)

2 先行研究

ドイツ再統一後、新連邦州の観光研究は質量共に飛躍的に向上した。その中でメクレンブルク湖水地方を事例として扱った研究も少なくない。Albrecht und Albrecht (1991) は東ドイ

ツ期のノイブランデンブルクを訪れる観光者の出発地と同地の観光における需要について論じた。ドイツ再統一以降の内容では、Kaufmann (1995) が同湖水地方の観光政策を講じる上で、観光に関わる関係者の協力関係を論じた。1990年代中盤からは観光と環境や景観の保護との両立について検討する研究が目立つ。同地方や同州における自然や文化的景観の保護と観光の両立について、自然観光の類型や対象7都市のプロジェクト事例に基づいて現状報告と評価を示した研究 (Lamping. 1995; Leupolt. 1999, 2000)、州内の都市やその歴史的建築物の修復の過程を踏まえ、観光者数などを基に観光に注力している都市の現況と概観について示した研究 (Kutzki. 2001) が代表的である。

このように、昨今の同地方の観光に関する研究は、ドイツ国内で認知されている自然が豊富な地域であるといった自然的環境や第二次世界大戦から東ドイツ期を経て残った歴史的な遺産、そしてこれらが融合した文化的景観の保護の高まりを背景として、世界的にも重要視されている「開発と保護との両立」の視点による研究は多い一方、観光地としての存在そのものに着目し、観光における特性や意義、役割等、一連の構造について考察しているものは不足している状況である。

3 研究方法

本研究を遂行するにあたり、2010年4月10日から21日まで同地方においてフィールドワークを催行した。以下で示す聞き取り調査の内容や入手した2010年度版のパンフレットはすべてこの期間内のものである。フィールドワークでは地元の自治体から観光運営を委託されている観光マーケティング系法人6ヵ所 (州観光連盟、メクレンブルク湖水地方観光連盟、ノイブランデンブルク観光センター、ヴァーレン保養観光社、レーベル観光案内所、ノイシュトレリッツ観光案内所) とノイブランデンブルクの4つの宿泊施設において観光資源、観光パターン、観光者などの特徴について聞き取り調査をした。まず、文献から湖水地方における観光地としての成立過程と東ドイツ期までの状況についてまとめ、次にドイツ再統一から現在までの状況と今後の可能性について、聞き取り調査とパンフレットの内容、各種データを分析し、「観光者」、自然が観光資源である「リゾート部」、そして「歴史都市」の3つの観点に基づいて考察する。

4 研究対象地域の概観

メクレンブルク湖水地方は5810km²で、湖の数は1000に及ぶ。代表的な湖としては、ミューリッツ湖 (112.6km²)、ブラウ湖 (38.4km²)、トレンゼ湖 (17.9km²) などが挙げられる。また、主な都市としては郡に属さない独立市であるノイブランデンブルク (6万5900人)、メクレンブルク・シュトレリッツ郡の郡庁所在地のノイシュトレリッツ (2万1700人)、ミューリッツ郡の

郡庁所在地のヴァーレン（2万1200人）などが挙げられる（StatA MV, Statistischer Bericht A123, 2008）。ミュールッツ郡に広がる322km²のミュールッツ国立公園は東ドイツ期の1990年10月1日に設置され、同湖水地方の中でも特に自然環境が保護されており、「価値の高い歴史的文化的景観」（Kaufmann, 1995）を特徴としている。また、1998年には15000年前に氷河であった5000km²の地域がジオパーク「氷河期の景観」として同地方とメクレンブルク・スイス地方に跨って成立するなど、自然環境に富む地域である。

Ⅱ ドイツ再統一までの観光パターン

メクレンブルク・フォアポンメルンがドイツで初めて1793年にハイリゲンダムに海水浴場が開かれて以来、バルト海沿岸やリュウゲン島、ウーセドム島で観光・保養者が漸次増加した。1877年にベルリンーシュトラールズント間、1886年にベルリンーロストック間の鉄道路線が相次いで開通すると、メクレンブルク湖水地方においても、南に100kmのベルリンからを中心にして夏季保養地として観光者が急増し、特に第二次世界大戦前の1918年から1939年は大衆の観光ブームで大いに賑わった。メクレンブルク・フォアポンメルンは大都市であるベルリン、シュテティン、ハンブルクを結ぶ三角形の内側に位置しており、また、近隣の人口集中地域としてザクセンやザクセン・アンハルトがあるなど、立地の好条件が観光を支えた（Leupolt, 2000）。

第二次世界大戦後、この地域が東ドイツに属するようになって、引き続き旺盛な観光需要を受けた。それまでの市場であった西ベルリン、シュテティン、ハンブルクを東ドイツの国土から失い、近隣都市の需要は激減するが、それでも国家的なマスツーリズムの戦略によって東ベルリンや同国南部の工業県であるハレ県、ライプツィヒ県、カール・マルクス・シュタット県を観光客出発地として確保していた（Albrecht und Albrecht, 1991; Leupolt, 2000）。観光供給の一環として、域内各地にはキャンプ場やバンガロー施設、商工業やサービス業の組合から成り立つ大衆組織で関係産業に強い影響を持っていたFDGB（Freier Deutscher Gewerkschaftsbund 自由ドイツ労働組合同盟の略）の休暇用住宅、そして、子どものための政策を執るピオニーア組織（Pionierorganisation, 東ドイツの政治的な大衆組織の1つで、全国のほぼすべての児童・生徒がこの組織に属していた）の宿泊施設などが建設された（Kaufmann, 1995）。そして再統一から現在までメクレンブルク・フォアポンメルンは州としてはドイツ第一の観光地として発展することになった（Leupolt, 2000）。

東ドイツ期のメクレンブルク湖水地方について、地元観光関係者への聞き取り調査で示されたことは次の2点に集約することができる。第一に「宿泊はキャンプ場や休暇住宅が中心で、そのほかの宿泊施設は少なかった」（アンドレア・ナーゲル Andrea Nagel メクレンブルク湖水地方観光連盟代表、ノイブランデンブルクのプライベートルーム経営者ハンス・ヨアヒム・

ハルト Hans Joachim Hardt 氏)。東ドイツ期の観光インフラは軽施設が中心で、たとえば第二次世界大戦前の同州リュエゲン島のプローラにあるような大規模保養用集合アパート建設などではなかったと言える。第二には「歴史的なものも含めて建築物は汚く荒れており、観光資源は専ら自然であった」(カリーン・シュレーダー Karin Schröder ヴァーレン保養観光社社長)、「観光形態としては専らキャンプや湖岸での保養。FKK(Freikörperkultur 裸体主義の略。東ドイツでは1970年代から発展した)も好評であった」(クリスティーン・チェヒ Christine Czech ノイシュトレリッツ観光案内所所長、ガブリエレ・ビル Gabriele Bill ノイブランデンブルク観光センター・マーケティング担当)こと。このように、東ドイツ期には歴史・文化観光は萌芽がまだ出ておらず、観光形態は第二次世界大戦以前と同様に保養が中心であり、それに加えて、自然環境を活かして楽しめるキャンプやFKKといった新しい要素が加わったことが示された。

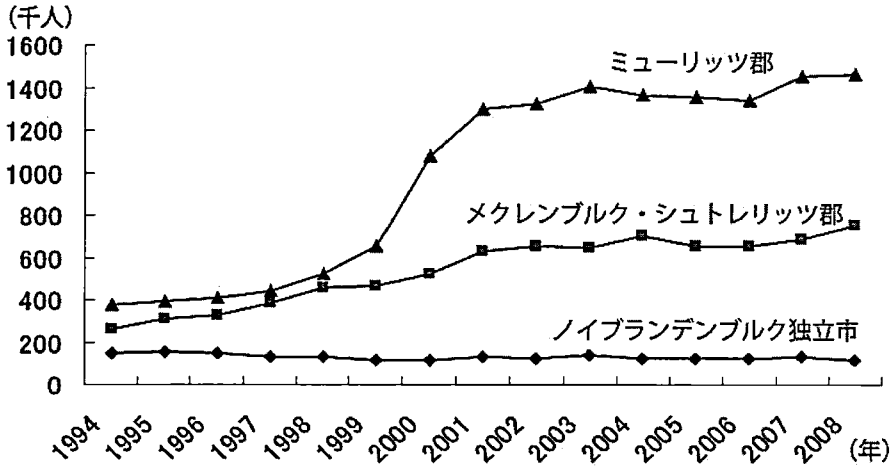
Ⅲ ドイツ再統一後から現在までの観光パターン

1 観光者

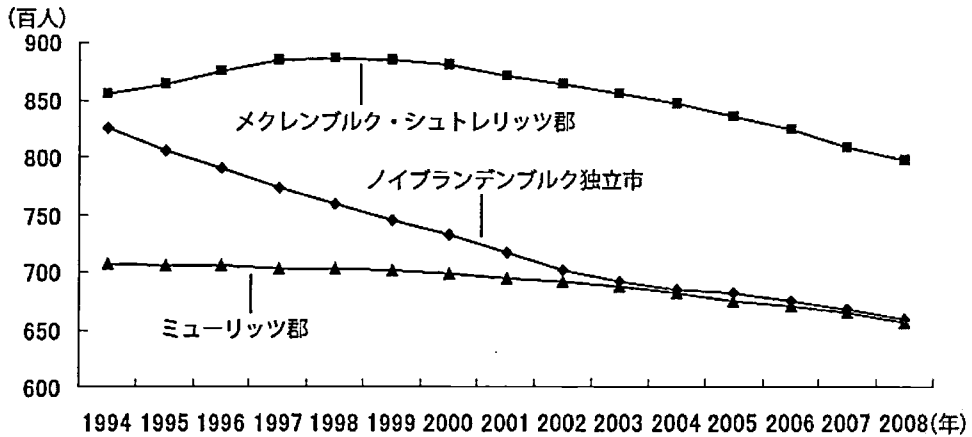
ドイツ再統一後の延べ宿泊者数の推移については、第2図で示した。1994年と2008年を比較すると、ミューリッツ湖やプラウ湖を有するミューリッツ郡は37万6000泊から146万1000泊へと3.9倍の急激な成長を遂げた。メクレンブルク・シュトレリッツ郡も26万5000泊から75万3000泊へと2.8倍の成長をしている。両郡は西側に市場が広がったことと、高速道路や鉄道の新設や修復、観光情報の発信など観光インフラが年々整備されてきたことによる恩恵を受けていると言える。その一方、市域にトレンゼ湖を抱える独立市ノイブランデンブルクは14万5000泊から11万6000泊へと20%減少している。東ドイツ期のメクレンブルク・フォアポンメルン州はロストック県、シュヴェリーン県、ノイブランデンブルク県の3つの県に分かれていた。ノイブランデンブルク市はノイブランデンブルク県の県庁所在地であり、商工業で発展したが、ドイツ再統一後に県が廃止されると、広域における同市の政治経済の重要性が縮小し、第3図で示したように、急激な人口の流出を免れなくなった²⁾。現在の郡部においては元々、自然観光を売り物にしていたが、ノイブランデンブルクは「メクレンブルク経済の1つの中心都市」(Becht und Talaron, 2010)であり、業務で滞在する宿泊者を多く抱えていたものが、縮小してきたと考えられる。また、2008年の観光者平均宿泊日数はミューリッツ郡とメクレンブルク・シュトレリッツ郡がどちらも4.0泊、ノイブランデンブルクは1.9泊であった(StatA MV, Statistischer Bericht G413. 2008)。

外国人観光者に関しての同地方の統計はないが、州としては2005-2009年の5年間の統計で延べ宿泊数が2.6-3.0%の割合となっている。また、ノイブランデンブルクにおける出身国別の延

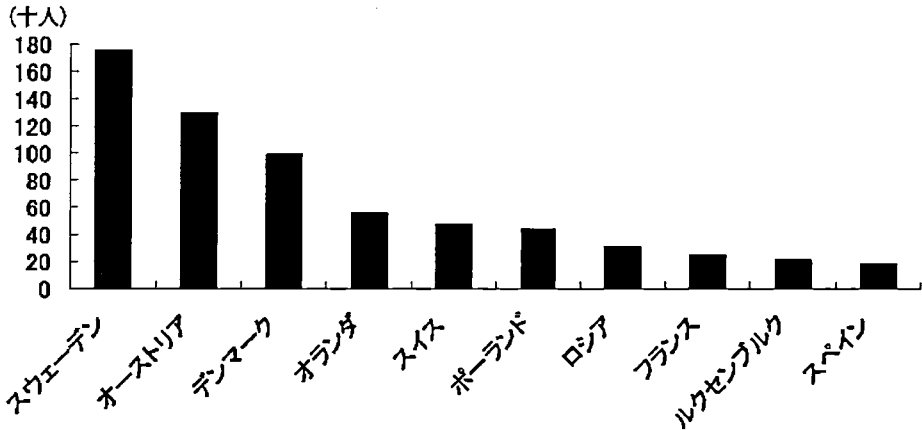
べ宿泊者数からは北欧とドイツ語圏、ベネルクスが外国での主要市場となっていることがわかる（第4図）。なお、統計からは確認できないものの、聞き取り調査からは、どの都市も年間の観光者のうち50歳代以上が概ね60%以上であること、しかし、シーズンである夏季に限れば子供連れの若い家族が過半数を占めているという見解が示された。



第2図 メクレンブルク湖水地方の各自治体における延べ宿泊者数の推移
(StaLA MV, Statistisches Jahrbuch. 1995 - StatA MV, Bericht G413. 2008を基に作成)



第3図 メクレンブルク湖水地方の各自治体における人口の推移
(StaLA MV, Statistisches Jahrbuch. 1995 - StatA MV, Bericht A123. 2008を基に作成)



第4図 ノイブランデンブルクにおける上位10位までの延べ宿泊者出身国 (2008年)
(ノイブランデンブルク観光センターにおいて入手した統計を基に作成)

2 リゾート部における観光パターン

メクレンブルク湖水地方はサイクリングやキャンプ、ウォータースポーツといった自然観光が主流である。湖水地方観光連盟は観光パターン別に2種類（カヌー、自転車）のパンフレットを発行しており、また、メクレンブルク・フォアポンメルンキャンプ・キャンピングカー観光連盟発行のキャンプ場のパンフレットを紹介している³⁾。カヌーは14ルート、自転車は17ルート、キャンプ場は61カ所（うちFKK用キャンプ場は2カ所）となっている。自転車のルートのうち1つはテーマ性を持った「氷河期街道」で、これはジオパーク「氷河期の景観」となっている域内を周遊するというものである。また、地方を超えた「ベルリン－コペンハーゲン自転車街道」と「メクレンブルク湖水街道」（リューネブルク－ウーセドム島）も同地方を經由する。昨今、「特に人気を集めているのが自転車による観光」（シュレーダー氏）で、地方内外といった広域を移動する交通手段としても自転車を活用している観光者と自家用車などで来訪し、湖岸の周遊観光のみに自転車を扱う観光者の2パターンがある。前者は持ち込んだ自転車を利用し、後者は現地で自転車を借りている（第5図）。

シュレーダー氏によると、「ヴァーレンでは自転車での湖岸周遊が観光行動として最も人気があり、次いで、ミューリッツ湖でのクルーズ、3番目に水泳やサーフィン、カヌー、ボート、4番目に乗馬、キャンプ、最後に都市観光」であるとし、クルーズについては「ミューリッツ湖内だけでなく、湖水地方を介して水路で繋がるベルリン－ハンブルク間を6週間かけて巡る船旅も人気である」と述べた。また、ヴァーレンには2007年にオープンした「ミューリツェウム」（湖水地方に棲息する50種類の魚や生物を集めた1200m²の水族館）があり、地方内のほかにはないヴァーレン固有の観光資源として重要である。州観光連盟はこのほかフィットネス

やウェルネス対応のレジャープール（域内3カ所）や乗馬場（同17カ所）、釣りに関するパンフレットを発行しており、また、メクレンブルク・フォアポンメルンゴルフ連盟発行のゴルフ場（同3カ所）のパンフレットを紹介している⁴⁾。レジャープールでの遊びや乗馬、ゴルフはそれ自体を行なうことの方が主であり、必ずしもこの地方でなければならないということはない。しかし、ほかの観光行動と組み合わせることで観光の幅を広げるものである。湖水地方の都市は概ね「観光業以外は農業くらいしか産業がない。休暇住宅の新築や改装は増えているが、人口減少には歯止めがかからない」（レーベル観光案内所のペトラ・シュルト Petra Schult 氏）状況である。第1表では湖水地方リゾート部における観光パターンをまとめた。山岳リゾートとは異なり、晩春から夏季にシーズンが限られているため⁵⁾、自然のままでは通年での観光業が成立しにくいことが背景としてある。そのため、上記のようにさまざまなレジャー施設が整備されることでシーズンオフの影響をできるだけ最小限にとどめることが可能となると期待される。



第5図 湖岸の貸し自転車屋（ヴァーレン）
 (2010年4月15日著者撮影)

第1表 メクレンブルク湖水地方リゾート部における観光パターン

観光パターン	ルート・施設数	行動範囲	シーズンの影響	地方固有性
カヌー	14ルート	広い	大きい	強い
自転車	17ルート	広い	大きい	強い
キャンプ	61ルート	狭い	大きい	強い
レジャープール	3カ所	狭い	小さい	弱い
乗馬	17カ所	狭い	中程度	弱い
釣り	複数	狭い	中程度	強い
ゴルフ	3カ所	狭い	中程度	弱い
ミュージウム	1館	狭い	小さい	強い

(前述のパンフレットを基に作成)

3 歴史都市における観光パターン

文化歴史的観光資源もないわけではない。湖水地方の歴史都市として有力なのは、ノイブランデンブルクとノイシュトレリッツである⁶⁾。ノイブランデンブルクは1248年にブランデンブルク辺境伯が整備した街で、市内には14-15世紀に築かれたレンガゴシック様式の都市門や1300年頃の都市外壁、中世の木組み建築様式のヴィークハウス（Wiekhaus. 都市外壁に張り出して設置された見張り小屋）が残っている。しかし、第二次世界大戦によるソ連軍の侵攻で、旧市街の80%が破壊された結果、東ドイツ期の「殺風景なプラッテンbau（Plattenbau. 飾り気のない鉄筋コンクリート建築）や幅の広い道路が第一印象」（Becht und Talaron. 2010）の都市となった（第6図）。東ドイツ期の建築物は市内各所で見られるが、都心では市庁舎やラディソン SAS ホテル、1965年建設で高さ56mの文化教育棟（第7図）が目を引く。多くの観光ガイドブックはこうした東ドイツ期の建築物を好意的に紹介しない（たとえば、Lonely Planet. “Germany”. 2007. や Michael Müller Verlag. “Mecklenburg-Vorpommern”. 2010）が、東ドイツ建築を色濃く残したこの都市は東ドイツに興味関心のある者にとっては当時の文化や歴史の面影を強く感じることでできる大変興味深い都市であると言える。

ノイシュトレリッツは1701年から1918年まで神聖ローマ帝国、ドイツ帝国の構成国であったメクレンブルク・シュトレリッツ大公国の首都であった都市である。城は1712年に消失したが、城の庭園と1755年建設のオランジェリーは市を代表する見所の1つである。

こうした歴史都市を繋ぐ観光街道も整備されている。2004年に設立され、7カ国⁷⁾に跨る総距離2500kmの「欧州レンガゴシック街道」がそれである。レンガゴシック建築はハンザ都市を中心としてバルト海沿岸地方の象徴であり、両都市の近隣では世界遺産都市のリューベック、ヴィスマール、シュトラールズントなどもこの街道が通っている。チェヒ氏は「この街道はまだ設立されて時間が経っておらず、影響は限定的である」と語ったが、バルト・ドイツの壮大な歴史と伝統を今に伝えるこの街道は今後のアピール次第で有力なものになる可能性があり、そうすれば湖水地方の両歴史都市は地方を代表して、街道を利用する観光者の誘致が可能である。

また、両都市においても「ドイツ国内で人気となっている自転車での周遊者の誘致に力を入れている」（ゲアト＝ヘアヴィヒ・ローゼ Gert-Herwig Rose ノイブランデンブルク観光センター代表）。市内で聞き取りした4つの宿泊施設⁸⁾からは年間の自転車観光者について、プライベートルームで3-5%、10-15%、20%、ホテルで10%以下であると示された。ローゼ氏は「文化歴史的な観光資源だけでは観光者増は見込めない。湖水地方の自然環境に自転車での周遊やウェルネス・健康といった付加価値を付けることが必要」と語った。チェヒ氏も「文化・歴史と自然は市の観光資源として両方重要であり、どちらかに特化はしていない」と述べた。

このように、湖水地方の歴史都市の観光はその歴史性だけでなく、湖など地方内の自然と密接な結び付きがあることが示された。しかし、レンガゴシックなどシーズンの影響を受けにくい文化・歴史的な観光資源を一層アピールする必要も出てくると考えられる。



第6図 ノイブランデンブルクにおけるブラッテンハウの様子
(2010年4月11日著者撮影)



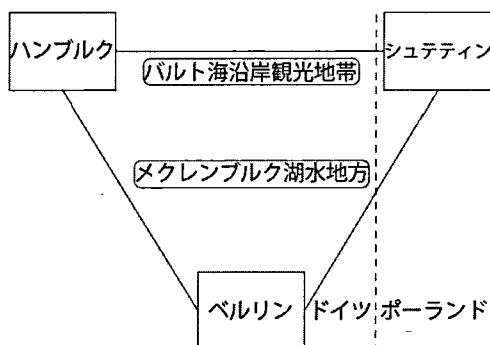
第7図 文化教育棟
(2010年4月11日著者撮影)

3 観光の今後

同湖水地方は観光地として地理的にも有利な地点に位置している（第8図）。2004年にはEUの東方拡大により国境での審査が廃止され、この地方とポーランドとの間で高速道路や列車を使ってのアクセスが容易になった（第9図）。1990年のドイツ再統一と合わせて、この地方が第二次世界大戦前に市場としていた都市はすべて回復された。ドイツ人観光者にとってシュテティンなどのヒンターポンメルン地方は家族や先祖の出身地、あるいはかつてのドイツの圏

気が感じられる地として郷愁ある地方である。ドイツを訪れる外国人観光者にとってはポーランドを体験するメリットがある。シュテティン側にとってもドイツからの観光者が流れてくることは経済的にメリットがある。フォアボンメルンとヒンターボンメルンはすでに多次元のEU共同プロジェクトが始まっている⁹⁾。かつての歴史的な繋がりもあり、ヒンターボンメルンを広域観光地に取り組むことは有意義である。その際にはまだ多くの改革が求められる。たとえば自転車観光者誘致に関しては、現状では自転車道の整備やモデルルートの開発などは行なわれているが、湖水地方内各地、あるいはベルリン、ハンブルク、シュテティンなどの広域においても自転車の貸し出しやメンテナンスのシステムが統一され、観光者はどの都市でも自転車を借り、返すことのできるシステムの構築があると一層便利になる。

州観光連盟のトビアス・ヴォイテンドルフ Tobias Voitendorf 渉外調整部長は州の課題として「大都市がないこと、国際空港がないこと、外国人観光客の比率がまだ低いこと」の3点を挙げ、「ドイツの人口が減少している中で、特に外国人観光者の誘致は不可欠だ」と述べた¹⁰⁾。外国人観光者の少ない要因の1つには、外国人がイメージするドイツに北ドイツが入りにくいといったことも考えられる。一方、シュレーダー氏やチェヒ氏が「外国語を話せる人材もあまりいない」と言うように、湖水地方側も実際はドイツ人観光者以外まだそれほど念頭においていない。しかし、広報を増やせば関心を持たれるのだろうか。この湖水地方は外国人観光者を誘致できるほどの観光地であるのか。外国人観光者の求めるニーズに対応した今後の展開が注目される。これに関連する域内の現状として、観光拠点である宿泊施設の種類の少なさが挙げられる。域内には確かに一泊15ユーロ前後の安宿は多いが、多くは民家が空いている1-2部屋を貸しているだけであり、若者が集まれるタイプのものはない。しかし、たとえばポーランドの世界遺産都市クラカウでは若者向けのゲストハウスが集中した地域があり、観光者同士が知り合え、また、長期滞在者も多いといったおもしろさがある。ドイツにおいてもベルリンやラ



第8図 メクレンブルク湖水地方を取り巻く地理的な相関図

イブツィヒ、フランクフルト（マイン）など中規模以上の国際都市では少しずつそのようなタイプのゲストハウスが出てきている（たとえば、『地球の歩き方 A14ドイツ 2009～2010年度版』2009. が紹介）。人口減で空いた建築、とりわけリゾート部の比較的規模の大きい家々やノイブランデンブルクなどの都市部にある東ドイツの歴史を伝えるプラッテンバウなどをこうしたゲストハウスに転用することで、年配者や夏季の子供連れ家族に続く新たな観光者層の誘致が開けてくるのではないだろうか。



第9図 ノイブランデンブルク駅に停車中のシュテティン行き快速列車

(2010年4月20日著者撮影)

IV 結論

まず、メクレンブルク湖水地方における観光にはこれまで3つの発展段階があったことが確認された。最初の段階は19世紀後半から第二次世界大戦勃発までの期間で、観光地として確立された時期に当たる。この期間は広範な都市・地域から観光者を集めたが、観光パターンは湖岸での保養にほぼ限定された。次の段階は東ドイツ期である。この期間は前段階の市場を大きく失ったが、国家的な主導の下に観光が牽引されたことで、主としてキャンプ場が整備され、国内の中部・南部からの観光者を集めた。そして現在に続く段階として、ドイツ再統一以後を挙げることができる。前段階までの局地的な観光と異なり、技術的な進歩も加わって、さまざまな新しい観光パターンが確立された。その最たるものが自転車での周遊観光である。単に湖岸を1周するルートだけでなく、テーマ性のあるルートも考案された。新規の観光施設も次々に設立され、天候の悪い日やシーズン外にもある程度対応できうるものとなった。リゾート部においては、失われた市場の回復という外的要因のほかにこうした内的要因が合わさって、再統一後の観光者数増として結実した。一方、歴史都市は苦戦を強いられている。文化・歴史性をアピールしつつも、リゾート部と同様の観光政策を敷いているが、観光者増には繋がっていない。

ない。観光街道や観光資源、観光環境など点においてさらなる工夫が求められる。地方全体の今後はドイツ人の人口減少や観光へのニーズの変容が考えられる中で、外国人観光者の誘致が1つの鍵となる。本文中に例を挙げたが、外国人観光者に長く愛される観光地としてブランド化するためには、どのようなニーズがあるかを見極めていかなければならない。

参考文献

- Albrecht, G. und Albrecht, W. *Wüstungen – ein Aspekt der Siedlungsnetzgestaltung durch die Regionalplanung im DDR – Bezirk Neubrandenburg vor 40 Jahren*. Greifswalder Beiträge zur Regional-, Freizeit- und Tourismusforschung. Band 16. 2005. S.15-32.
- Albrecht, G. und Albrecht, W. *Greifswald und Neubrandenburg als Zentren des Stadttourismus in der DDR*. Freie Universität Berlin Institut für Tourismus Berichte und Materialien Nr. 12. 1991. S.61-72.
- Becht, S. und Talaron, S. *Mecklenburg-Vorpommern*. Michael Müller Verlag. 2010.
- 「地球の歩き方」編集室（著作編集）『地球の歩き方 A14 ドイツ 2009~2010 年度版』、ダイヤモンドビッグ社、2009.
- Kaufmann, C. *Die Tourismusentwicklung in der Planungsregion Mecklenburgische Seenplatte aus regionalplanerischer Sicht*. Greifswalder Beiträge zur Rekreatiogeographie / Freizeit- und Tourismusforschung. Band 6. 1995. S.163-168.
- Kohl, H., Marcinek, J. und Nitz, B. *Geography of the German Democratic Republic*. VEB Hermann Haack Geographisch-Kartographische Anstalt. 1986.
- Kutzki, R. *Stadterneuerung in Mecklenburg-Vorpommern und ihre Bedeutung für den Tourismus*. Informationen zur Raumentwicklung. Heft 9/10. 2001. S.597-607.
- Lamping, A. *Wasserwandern – Chance für einen umweltorientierten Tourismus? Grundlagen und Ergebnisse einer Touristenbefragung in der Neustrelitzer Kleinseenplatte 1994*. Greifswalder Beiträge zur Rekreatiogeographie / Freizeit- und Tourismusforschung. Band 6. 1995. S.169-200.
- Leupolt, B. *Hochwertiger Natur- und Kulturtourismus – Eine Entwicklungsperspektive für Mecklenburg Vorpommern*. Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie. Heft 2. 2000. S.113-123.
- Leupolt, B. *Mecklenburgische Seenplatte – Schutz des Natur- und Kulturräumens versus touristische Inwertsetzung – Projekte im und um den Müritz-Nationalpark*. Hamburger Geographische Studien. Heft 48. 1999. S.593-611.
- 1) 欧州の湖水地方としては英国やフィンランド、オーストリアなどのものが観光地として国際的に有名であるが、ドイツではメクレンブルクのほか、ブランデンブルク、オーバーラウジッツなどがある。また、ポーランドの北部などにも湖水地方が形成されている。
 - 2) 1994年と2008年の人口比較では、メクレンブルク・シュトレリッツ郡が8万5500人から7% 減の7

万9700人、ミューリッツ郡が7万700人から同じく7%減の6万5700人であるのに対し、ノイブランデンブルクは8万2600人から20%減の6万5900人と減少が著しい。

- 3) パンフレットのタイトルはそれぞれ、“Paddeln im Land der Tausend Seen”（カヌー）、“Radeln im Land der Tausend Seen”（自転車）、“Camping Mecklenburg-Vorpommern”（キャンプ場）である。フィールドワーク期間に湖水地方観光連盟にて入手。
- 4) パンフレットはそれぞれ、“Leisure Pools”（レジャープール）、“Reiturlaub”（乗馬場）、“Angelparadies”（釣り）、“Golfland”（ゴルフ場）である。フィールドワーク期間中にメクレンブルク湖水地方観光連盟にて入手。
- 5) Leupolt(2000)は同州のシーズンは夏季を中心に年間100-150日であるとしている。また、Haveltourist GmbH & Co. KG “Camping & Ferienhäuser Mecklenburgische Seenplatte” (2009)では2010年のハイシーズンを7月10日から8月14日までの35日としている。
- 6) Kutzki(2001)は州内の歴史都市として、州都シュヴェリーン、世界遺産都市シュトラールズントとヴィスマール、バルト海沿岸のロストックとグライフスヴァルト、リューゲン島のプトブス、内陸のギュストロー、そして、メクレンブルク湖水地方のノイブランデンブルクとノイシュトレリッツを挙げている。ギュストロー、ノイブランデンブルク、ノイシュトレリッツの3都市は「文化都市」と題した共同のパンフレット“Kulturstädte Mecklenburgische Seenplatte” (2007)を発行、市内の歴史建築物などをアピールしている。
- 7) スウェーデン、デンマーク、ドイツ、ポーランド、リトアニア、ラトヴィア、エストニア。
- 8) プライベートルームを経営するレナーテ・カッペ=オウサイフィー Renate Kabbe-Oussaïfi氏（聞き取り2010年4月10日）、ラディソン SAS ホテルのクリームヒルト・ゲッパート Kriemhild Geppert氏（同4月13日）、プライベートルームを経営するウルスラ・マハ=ペーターズ Ursula Mach-Peters氏（同4月14日）、休暇住宅を経営するハンス・ヨアヒム・ハルト Hans Joachim Hardt氏（同4月17日）。
- 9) 現在、欧州内共同事業の一環として「メクレンブルク・フォアポンメルン／ブランデンブルク－西ポンメルン（ポーランド）国境地域協力2007-2013年（相互協力4a）」が行なわれており、これは2000-2006年の相互協力3aを引き継ぎ、発展させるものである。相互協力4aにおいても、観光は国境を越えたマーケティングを中心に優先懸案事項とされている。
- 10) Statistisches Bundesamt, Statistisches Jahrbuch (2009)によると、2008年のメクレンブルク・フォアポンメルン州における外国人観光客延べ宿泊者数は84万人で、全国13州と3特別市の中で多い方から11番目である。

Die touristische Lage und das zukünftige Potential in der mecklenburgischen Seenplatte

TOMOHARA Yoshihiko

Das Ziel des Aufsatzes ist die Überprüfung der gegenwärtigen Situation und des zukünftigen Potentials der Seenplatte als Tourismusort in Nordmitteleuropa. Das Beispiel ist die mecklenburgische Seenplatte im neuen Bundesland Mecklenburg-Vorpommern. Für das Studium wurde Feldforschung vom 10. bis 21. April 2010 gemacht. Die Ergebnisse sind;

Zuerst wurden 3 touristische Perioden der Geschichte der Seenplatte gefunden. Die Erste war von der letzten Hälfte des 19 Jahrhunderts bis zum Anfang des zweiten Weltkriegs. In der Zeit wurde sie als touristischer Ort gestaltet, und die Touristen vom Großraum des Dreiecks zwischen Hamburg, Berlin, Stettin, und aus Sachsen, Sachsen-Anhalt gesammelt. Sie kamen fast nur für die Kur. Die zweite Periode war die DDR-Zeit. In der Zeit verlor sie ihren damaligen Markt, aber unter der Regierung wurden viele Campingplätze angelegt, und die Touristen konnten von mittel- und südlichen Bezirken der DDR dahin kommen. Die letzte Periode war von der Wende bis heute. Die touristischen Formen der Seenplatte werden vielfältiger als in der zweiten Periode sein. Der beliebte Stil ist Radfahren. Es gibt viele touristischen Routen, nicht nur um den See, sondern auch thematische Routen. Die neuen Attraktionen werden nach und nach gemacht, damit man bei schlechtem Wetter oder in der kühlen Saison die Zeit besser nutzen kann. Als ein andere Faktor, der die Ferienorte schafft, kann die Marktvergrößerung angesehen werden. Die historischen Städte der Seenplatte haben jetzt noch Schwierigkeiten als touristische Städte. Sie appellieren an ihre Kultur und Geschichte, aber sie bieten auch touristische Formen wie die Ferienorte, trotzdem nehmen die Touristen nicht zu. Ihre Ferienstrassen, touristische Ressourcen und Umwelt sind noch verbesserungswürdig. In der Zukunft, wenn die deutsche Bevölkerung abnimmt oder ihre touristische Nachfrage sich verändert, kann die Seenplatte noch ausländische Touristen erwarten. Nun muss überlegt werden, welche potentielle Nachfrage sie haben.